



Place of Love

Lelouch*C.C. adult only

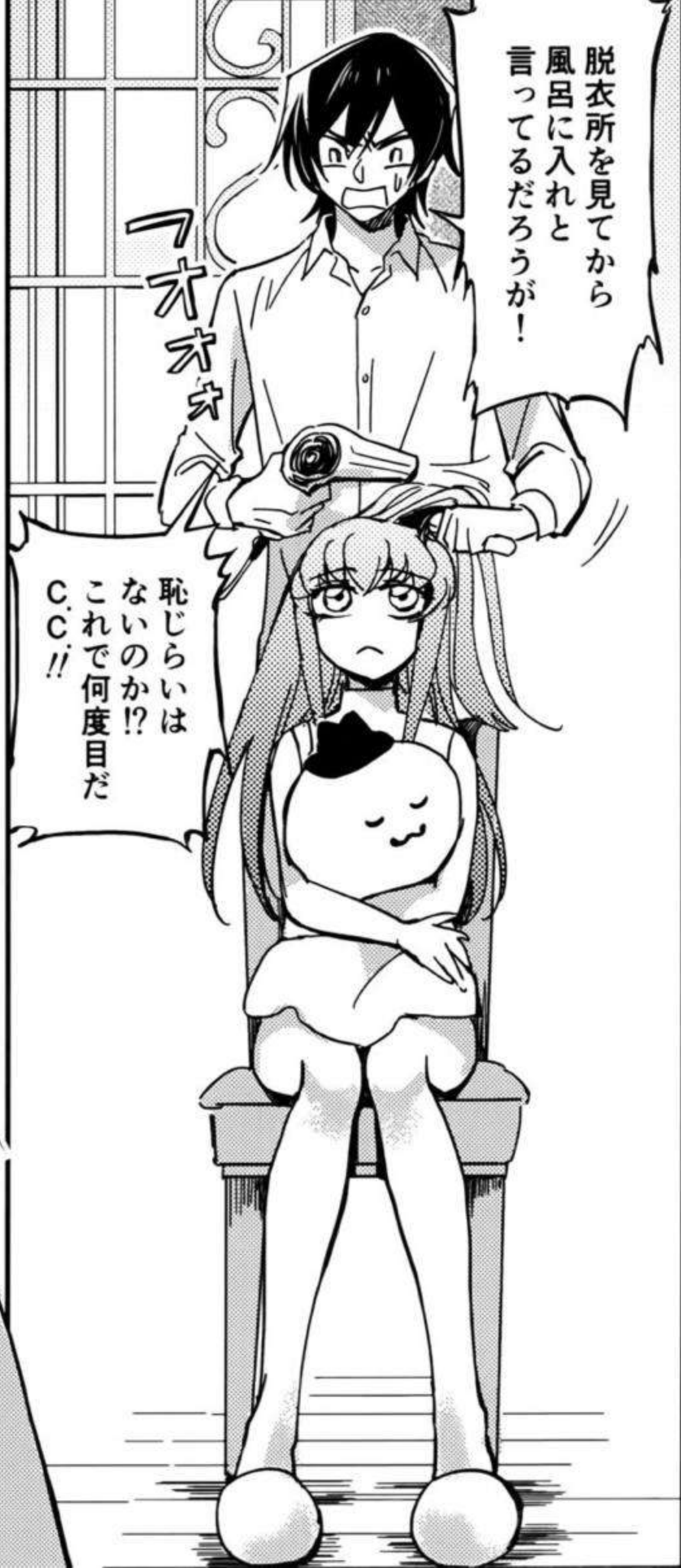
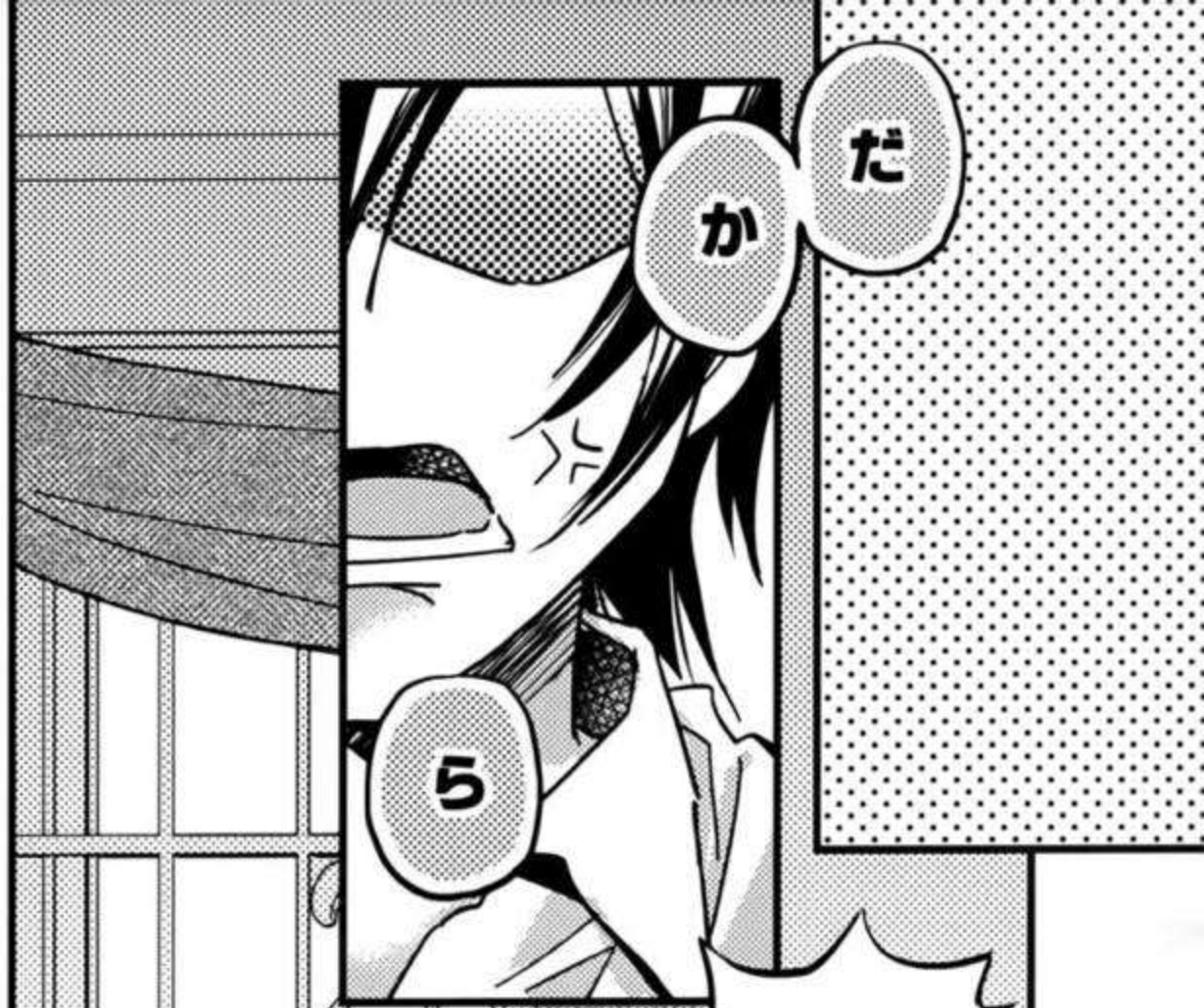
Place of Love

※ルルーシュ×C.C.

※世界線は話によってバラバラです

※性表現を含む話もあるので18歳未満の方の購読はご遠慮下さい







イキがるなよ
童貞坊やが

はっ

私の身体で
どうやって
幾多の男を虜にしたか
教えてやろうか



ふん、日がな
ぐうたらしている
ピザ女の裸に
誰が欲情するか



バチ

バチ

バチ



KAN!!

やっつやるの
じゃないか





安心しろ、
お前にそんな
度胸があるとは
思っていない

せいぜい一人の時に
私の身体を思い出して
マスをかくといいさ

ぽろっ



わッ

ハッ



お、おい

る



んっ……



んん……

ちゅ……

ちゅ……

んう

ふっ……



はあ

ふん、
ヘタクソが



どうなっても
知らないぞ？

はあ



ば...っ



今なら一言謝れば止めてやるが？



馬鹿が、私はC.C.だぞ

はあ



あッ

はあ

はっ

どんどん硬くなっていくの？

気持ちいいんだろう、観念したらどうだ

だ

誰がお前みたいな
童貞の手で感じる
ものか!

ツ
ビ

ね
ち
よ

ここは
随分と濡れて
いるな?

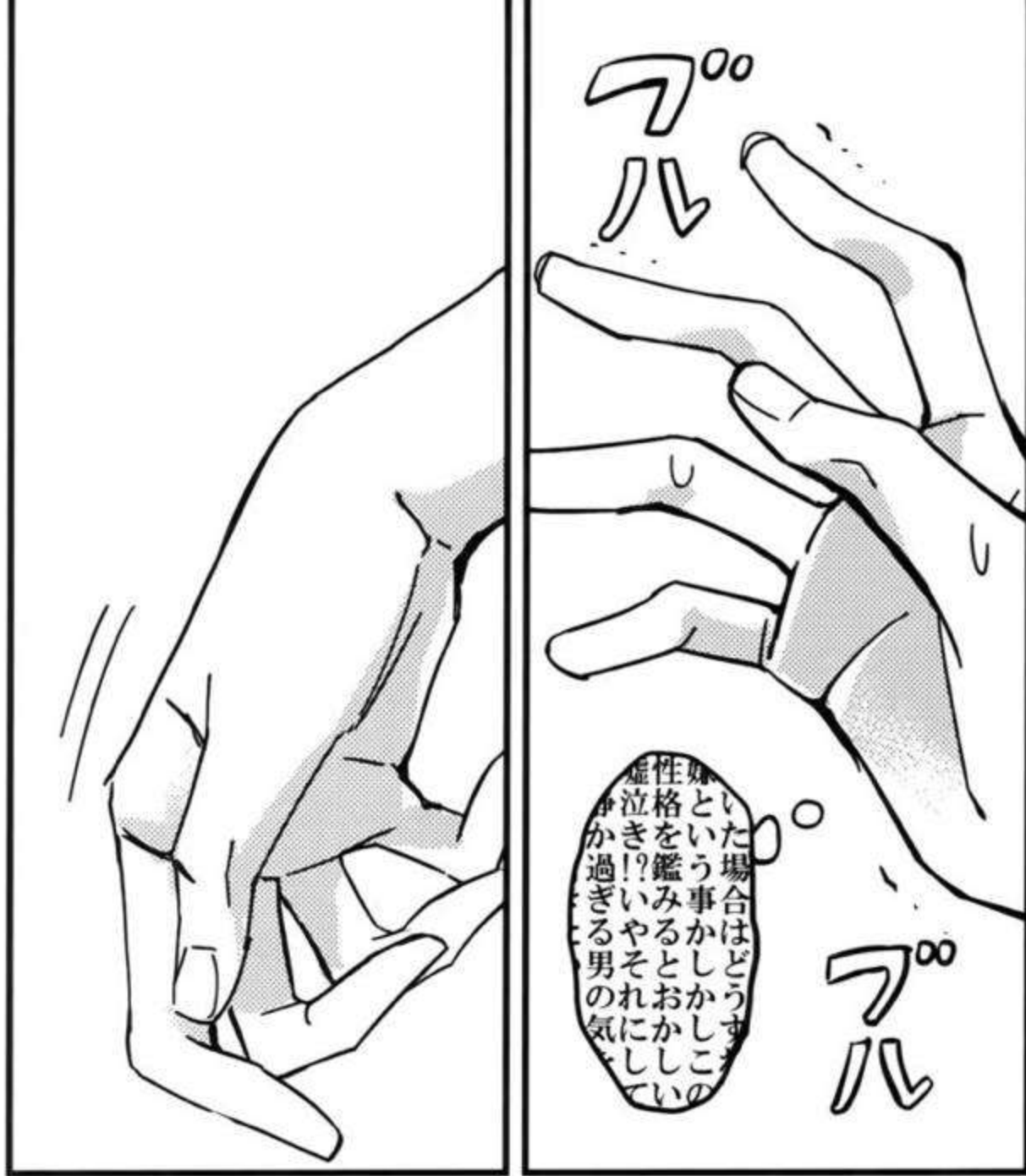
どういう事か
教えてくれないか
C.C.

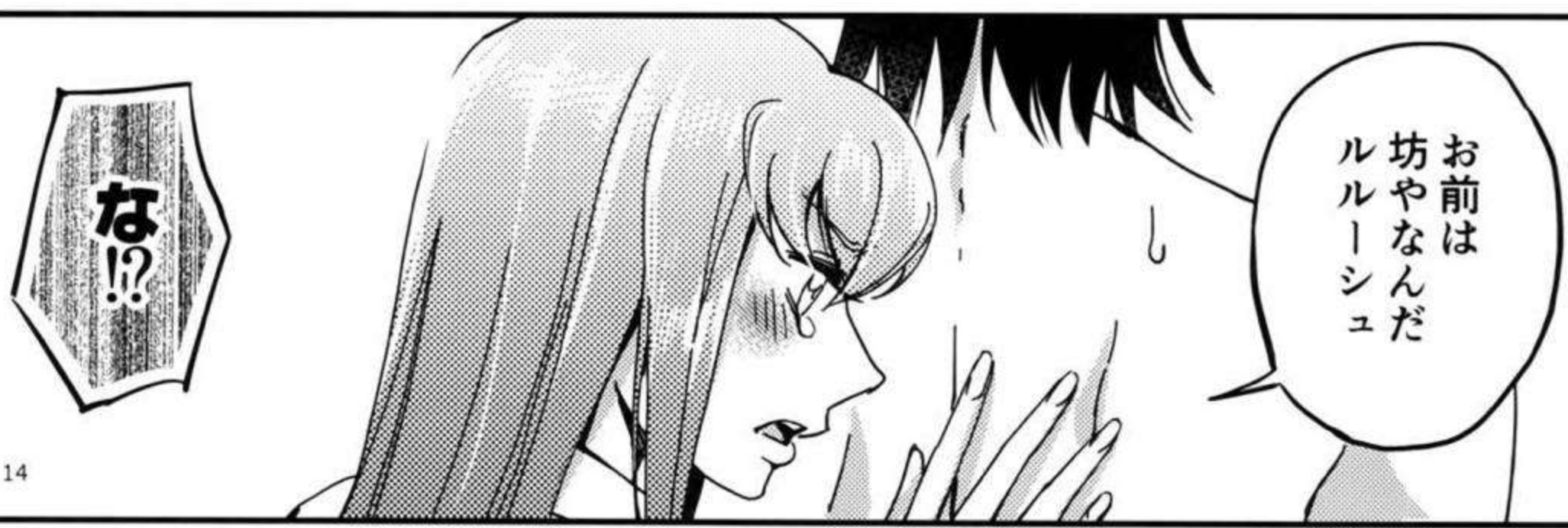
ク
キ
ン...

あ
っ

いい加減に
しろ変態!

ク
キ







う、うるさい
生理現象だ！

それより
こんな中途半端に
放置する奴があるか

…まあ
どうせ



だってお前
泣いてるじゃ
ないか



好きでもない
女なんて、
抱きたくない
だろうがな！



…好きじゃ
ないのは
お前の方
だろうが



さでは

ッ

うんたら

偉そうでケンカ腰
なのはお前の方だろう
C.C.!!

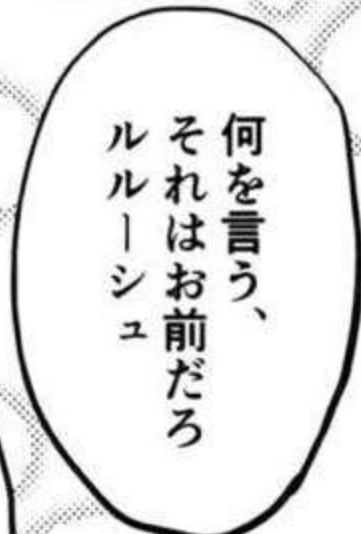


!?それはお前が
私に突っかかって
くるから

かんたら

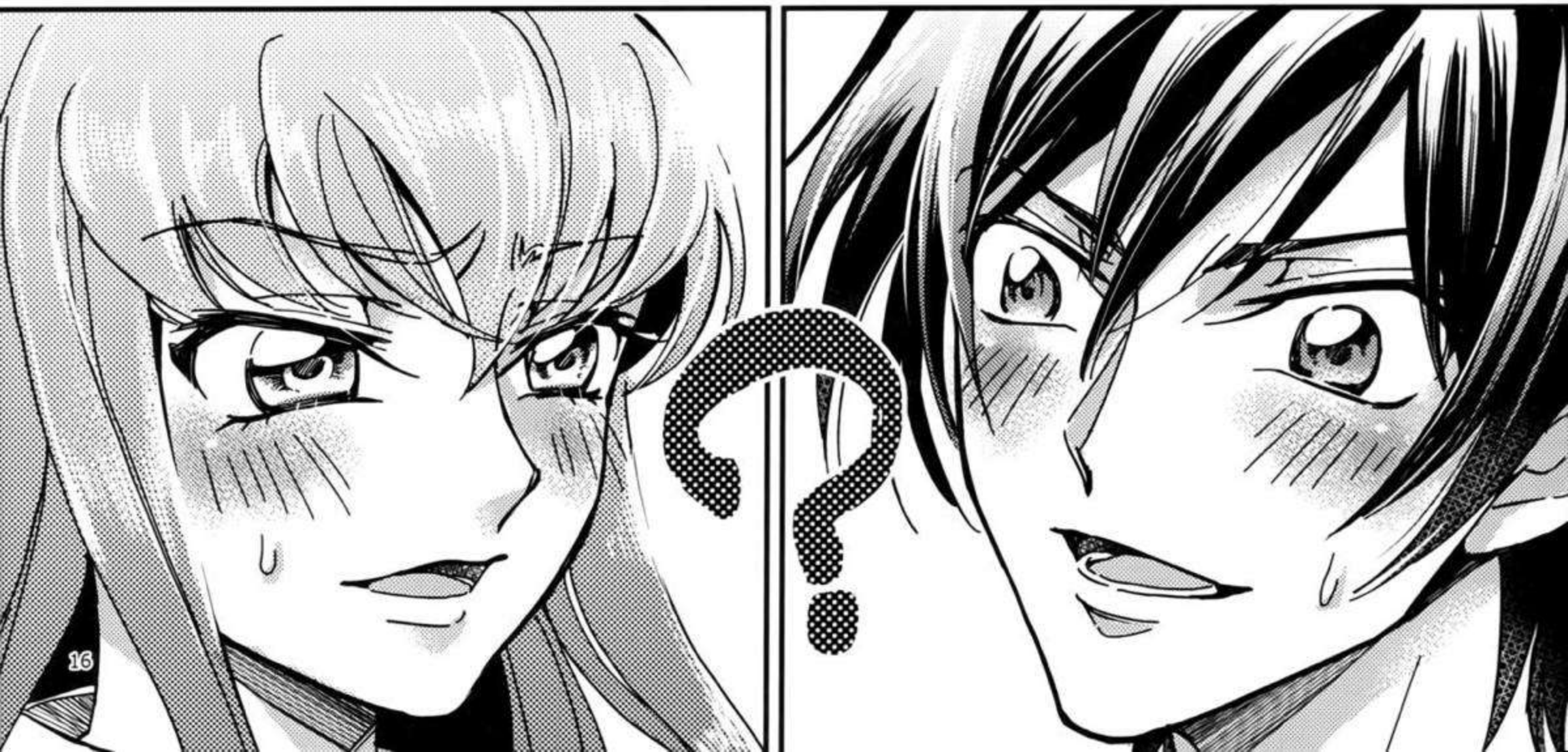


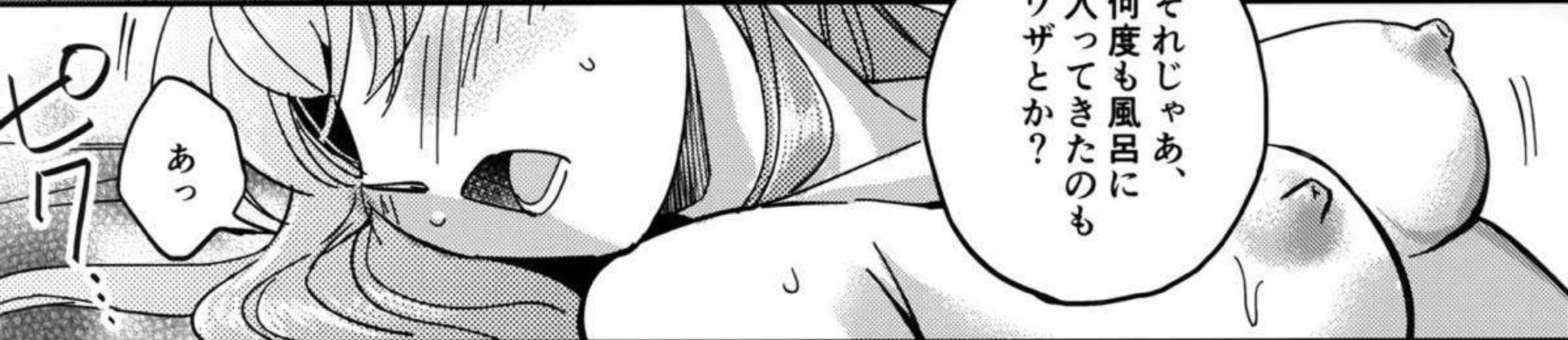
は？お前こそ
いつも俺を馬鹿に
してるじゃないか



何を言う、
それはお前だろ
ルルーシュ

たふんたら





それじゃあ、
何度も風呂に
入ってきたのも
ワザとか？



わ…

わ

わ、わ

はあ

はあ

はあ



それはだって、
お前が、いつも興味
なさそうにするのに
ムカついて

む、ムキにも
なるだろう！

分かれ
そのくさー！

はあ



わかるか
そんなことツツ!! ツ

せえ

せえ

せえ

※遅い

ふああッ

おん

お、
お互い様だろ

あっ♡
大体、こんな時に
喋り倒すやつが
あるかッ

だからお前は
童貞なんだ!

ヤッ

残念だったなC.C.
もう俺は童貞では
ない!!



……
……
……
もう黙れ



これも
想定外……

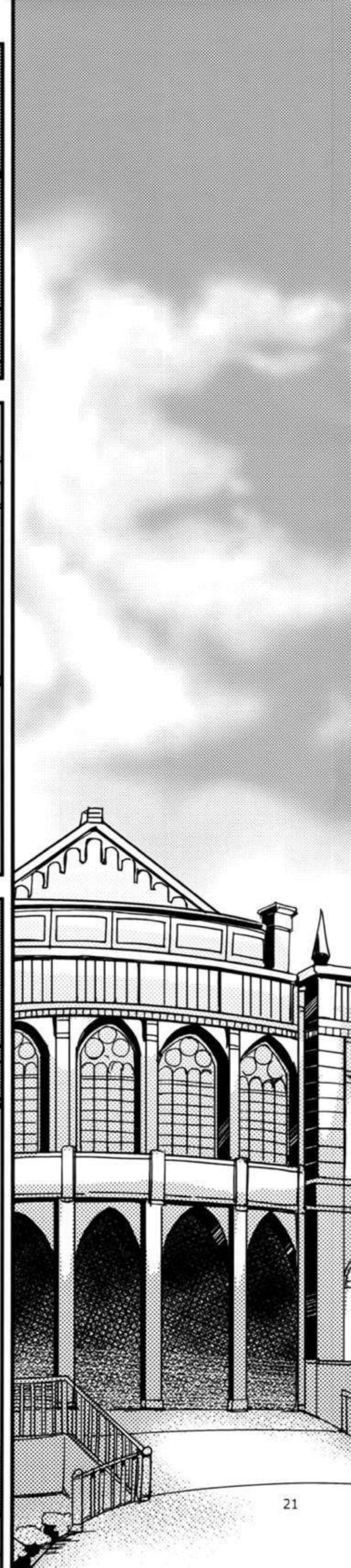
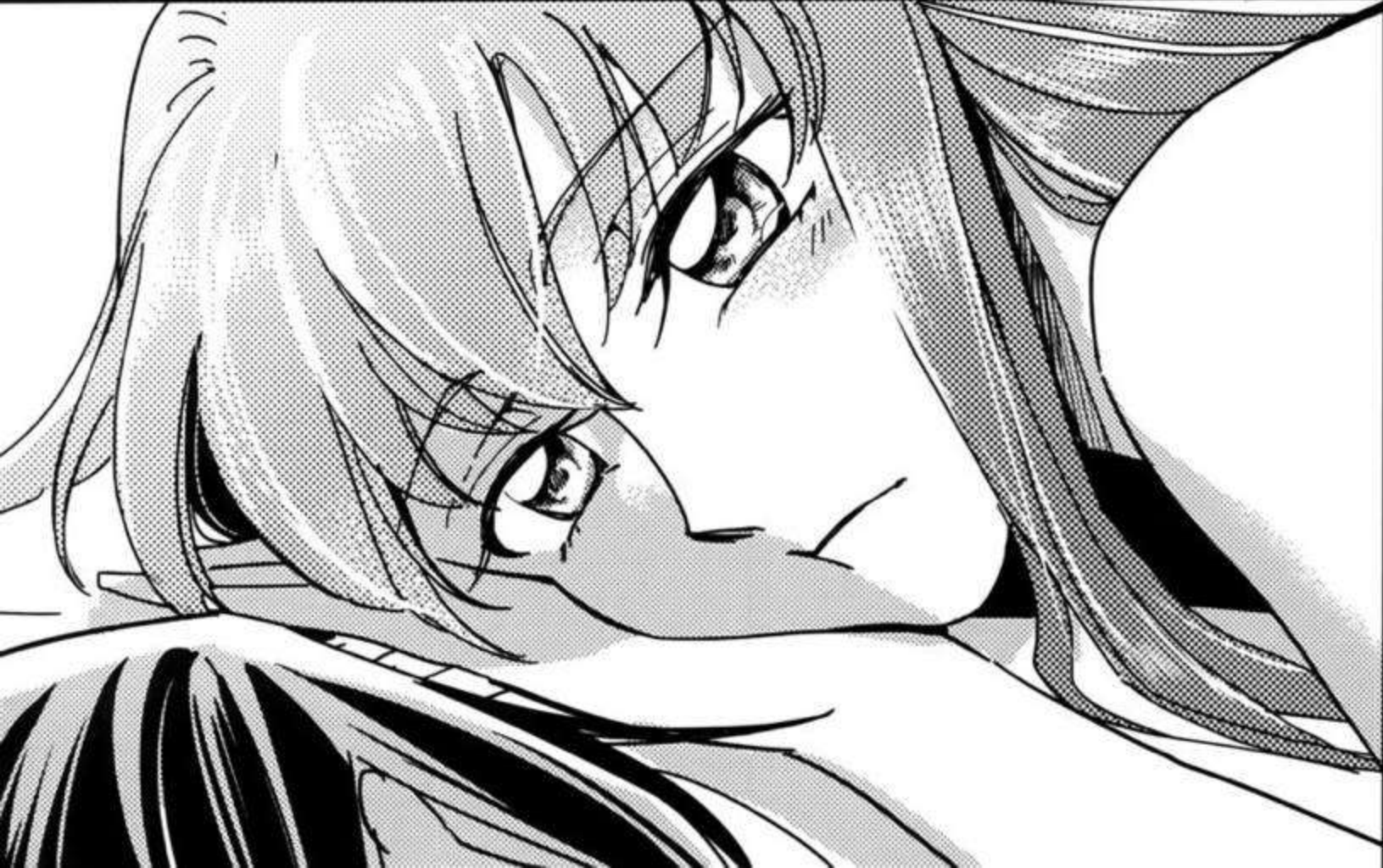
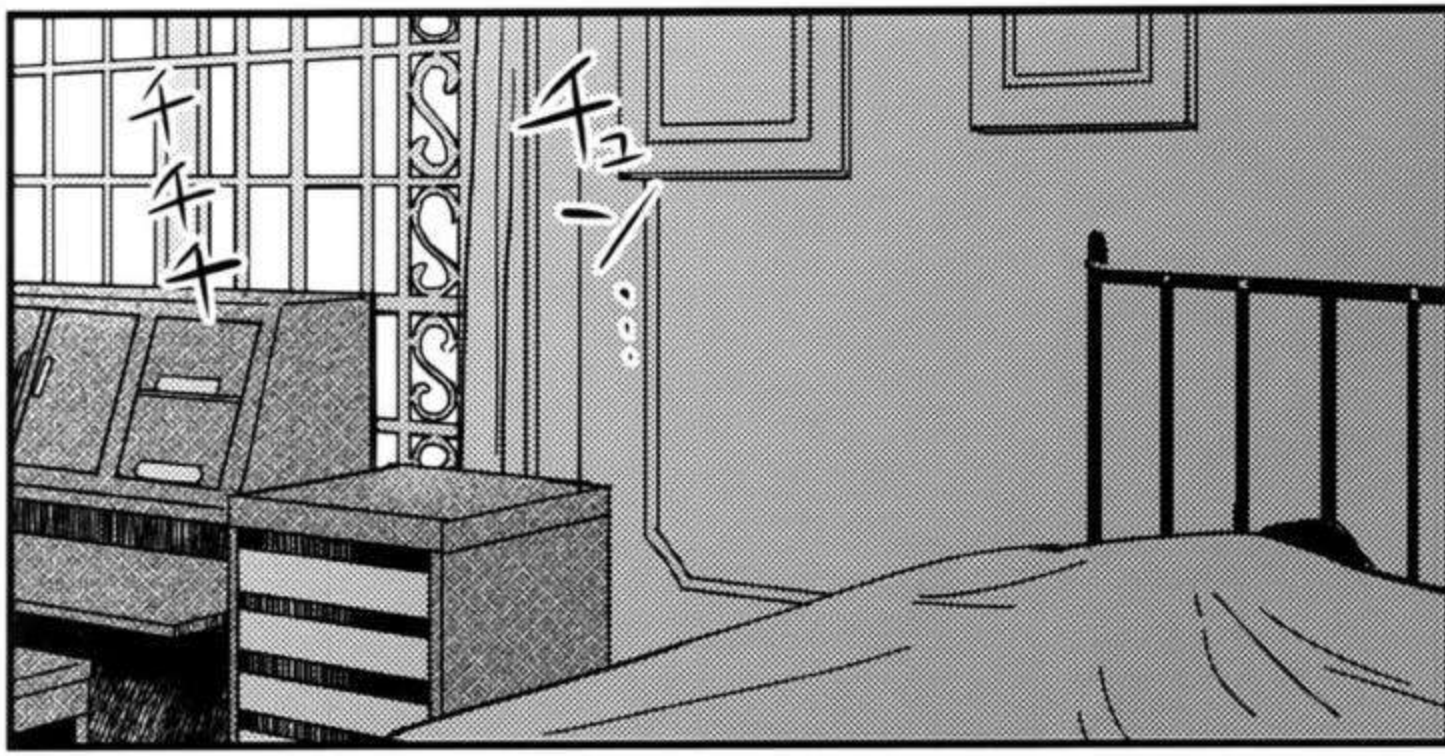
初めてでも
完璧にこなす
自信が俺にはあった

なのにこんなにも
思い通りに
いかないものなのか

いや

きっと相手が
C.C.だからこそ――









きゅん——



もう少し
だけ

……
きゅんきゅん



鮮やかな茜色が明るく天を燃やす代わりに重そうな雲が垂れ込め、一面鈍色に染まっていた空から雫が落ち始めた。

初めは頬に軽く当たってすぐに消え、上空から極小の豆が気紛れにぱらぱらと撒かれていたような雨の雫は頼りなく、滅多に歩く者もないのか、すっかり草木に覆われている道を行く足を止めさせるほどのものではなかった。それよりも夜の帳がゆっくりと、だが確実に辺りを濃い闇だけにしてしまう前に森を抜けて人里に降りる方が大事だった。土を踏み締め前へと進む音だけが、全ての命が息絶えたかのように静まり返っている森に吸い込まれていく。

最初の雫から十分ほど経った頃、ささやかな存在だった雨粒がその勢いをふいに加速させた。

ぼつりと落ちて凝った刺繍が施されたストールに小さな染みが出る。その染みが渴くより前にひとつ、またひとつと増えていく染みはストールの上で結びついて次第に大きな円となり、若葉色の生地を深緑に変えていく。

乾いた空気と高い気温のおかげで寒くはない。それでも濡れてしまうのは心地の良いものではないなと薄紅色の唇を苦い笑みの形にしたその時、右の手が強く引っ張られた。

「C.C.、急ぐぞ」

力強くはあるものの右手に痛みは感じず、急げと口にしたわりには急ぎ立てることはしない。

優しい男だ。

琥珀に柔らかかなものがふわりと灯る。無言で仰ぎ見ればそこには前だけを見る横顔。

濃さを増す闇色の中であってそれを切り裂くような揺るぎのない意思

を浮かべ強い光を放っている紫の双眸。それは出会った時から変わらず、紫が底知れぬ深紅に染まっても決して損なわれることはなかった。

少し、陽に焼けたか？

白皙の、という描写がこれ以上ないほど似合う男で、女の立場としては悔しさを感じないわけでもなかったが、密かに見惚れることもあった。その肌が夜目でも分かる程度にはかつてより色を乗せている。

人目を避けるべき存在であるから大っぴらに顔を晒して旅をしているわけではないものの、ジルクスタンからユーロに入るまでの間、日中は強い陽射しに照らされていたから肌が焼けるのは道理で、不老不死の身とは言え何ら不思議なことではない。

冬になる頃には日焼けも白く戻るだろうな。

そんな自身の考えにC.C.はふっと背中が硬くなり、胸が痛みと伴って縮こまるのを感じた。夏の終わりに冬のことを考えている。まるでそれが当たり前に巡って来るかのように。

愚かだな、私も。

C.C.はそつととルルーシュから目を逸らした。

選ばれて嬉しかった。

思わず涙が流れてしまうほどに渴望していたものは今この手で握っている。

でもそれは本当に自分が手に入れてよかったものなのか、これは間違った選択ではないのか。二人で時を重ねるごとに胸に湧き上がり、次第にその重さを増していく疑念という名の不安を振り払うようにC.C.は急かされるまま足を速めた。

繋いだ手は離さなかった。

雨足は激しさを増し、首筋から入り込んだ雨が背中をじつとりと濡らし、前髪からは雫が滴り落ち始めた。

「あそこ、使えるんじゃないか？」

一層強く引つ張られて視線を上げた先に、瓦解した建物が見えた。雨にけぶって見え難いが、それはC.C.にとって馴染みのあるものだった。

「教会……？」

「ああ、半分壊れているようだが雨くらいは凌げるだろう。このまま走れるか？」

「この私が心配されるのはな。体力に不安があるのはお前の方だと思うが」

C.C.の応酬にルルーシュの眦が軽く上がり、すぐに安心したように眼差しが柔らかくなった。

不意に覗いた優しい表情に思わず息を詰めそうになったC.C.だったが、教会らしき建物へと視線を逸らして胸の揺らぎを紫から隠した。

調子が狂う、何なんだこいつ。

「行くぞ」

雨の中足元に飛沫を上げながら辿り着いたそこは、かつてはこの地の人々の信仰の拠り所として大切にされていたであろう場所のなれの果てだった。入り口の扉があっただろう付近は完全に朽ちて汚れた煉瓦が積み重なって、それを避けながら中に入る。

暗いから足元に気を付けろと差し出された手をわざと無視したC.C.は天井が落ちて瓦礫だらけになっていく身廊を歩き、辛うじて雨が降り注がない程度には天井が残っている中央のドーム部分で足を止めた。雨を凌げるというだけで気付かないうちに強張っていた胸が解け、肩に入っていた力が抜けてC.C.の口から安堵の息が漏れる。

「古い教会だな」

後ろを歩いていたルルーシュの声にC.C.が改めて周りを見回してい

る間に、担いであった荷物を降ろしたルルーシュがチャージランプを取り出し、辺りを照らす。広範囲まで光が届くランプが闇に沈んでいた内部をルルーシュとC.C.の前に浮かび上がらせた。

時の流れの中で堅牢だったであろう建物は碎かれ汚れ、絡まる蔦だけが生命あるものだった。それでもアーケードや束ね柱を備えていたことが崩れた状態でも見て取れ、今は住む者もないこの森にもかつては居住地区があり、この教会もまた栄えていたのだと教えていた。

「バラ窓があるな、かなり大きい。ゴシック時代の教会か」

「そのようだ」

「この辺りで戦闘でもあったのか、崩れ具合から見てもうち棄てられて随分経っているようだ」

「そうだろうな」

口数少なく頷くだけのC.C.に秀麗な眉を寄せたルルーシュだったが、それ以上は何も言わずランプをC.C.が立っているドーム下を照らすように置き、祭壇の方へ向かった。

「この辺りはそんなに朽ちてないし、幸い雨も降り込まない。早めに街に着きたかったがこの雨だ、今晚はここで過ごすぞ」

緻密な装飾が施されていただろう祭壇は木製部分がほとんど崩れ、荘厳さを思わせるものは既に失われていたが、ランプから届く光を受けてかつては司祭が信仰を説いた祭壇前に立つルルーシュの姿は、崩れた教会の中であって厳粛さすら漂わせているようにC.C.の目には映った。この男はどんな場所でも、どんな存在となっても変わることもなく胸を張って立つのだな。その気高さは私には少し眩し過ぎる……。

ぼんやりとルルーシュを眺めていたC.C.だったが、聞き慣れたテノールに目を剥いた。

「C.C.、聞いているのか？ さっさと服を脱げと言っている」

「はあ？」

「濡れたままだと風邪を引くぞ」

「風邪、」

「そうだ。ほら、これで体を拭け」

いつの間にか手にしていたタオルを差し出すルルーシュにC.C.は呆れた表情を隠さず祭壇の方へと近寄った。

「あのな、私を誰だと思ってる？ 風邪など引かない」

「そうかもな」

ルルーシュの口がふっと自嘲気味に歪む様が視界に入り、琥珀が僅かに怯む。そうだ、私はC.C.。不老不死で不死身の存在。だから病も関係がない、今となってはそれはお前も同じ。口にしかけたそんな言葉を飲み込み、真っ直ぐ差し出されたままのタオルに手を伸ばして受け取りそっと胸に抱いた。思いのほか柔らかかなそれがC.C.の頬の輪郭を弛ませる。

「C.C.」

ルルーシュの手が雨に濡れて湿ったストールをC.C.の肩から脱がす。床に落ちたばさりとという小さな音が妙に辺りに大きく響いたように感じて、C.C.の鼓動がコトンと跳ねた。

ストールに守られていた分、服はそこまで酷く濡れてはいなかったものの充分湿っていて、ルルーシュの長く整った指先が器用に動いて留めてあったシャツの釦を上から順に外していく。

名を呼んだきり何も言わないルルーシュの手元をC.C.もまた無言で見詰め、釦が全て外され何もつけていない胸元が曝け出されていくままに任せた。

着ていたシャツはルルーシュの手によって脱がされ、背中にあたるランプの光がC.C.の半裸を白く包む。柔らかな輪郭を持つ胸を下から囲むようにある赤い傷にルルーシュの視線が当てられ、紫に怒りとも悲しみともつかない感情が漂うのをC.C.は静かに見返した。

寒さを感じる季節ではない。それなのにC.C.の肌理細やかな肌は粟立ち、光に照らされ産毛は金色に輝きながら微かに震えていた。

「お前が言うとお前、風邪など引かないかもしれない。だがな、だからと言って俺はお前を人ではないように扱うつもりは毛頭ない」

「ルルーシュ」

顔を上げたC.C.にルルーシュが言い聞かせるように言葉を繋いだ。「これまでもそうしてきたつもりだし、俺がお前と同じ存在となったこれからもそれを変えることはない。だから」

ルルーシュの手がC.C.が持っていたタオルを難なく奪い、ふわりと広げて緑色の頭にかけた。視界を遮られたC.C.が身を振るより先にルルーシュ手がその細い腕を掴む。

「とりあえず髪と体をちゃんと拭け、濡れたままにいるな」

ゴシゴシと乱暴だと言っている位の力加減で頭全体をタオルで拭かれながら、C.C.は馬鹿、痛いじゃないかとだけ小さく呟いた。

人の手によって壊され風雨に晒されて見る影もない礼拝室のひとつを一晚の宿と定めて座り込めば、後は他にすることもなかった。

毛布代わりにもなる薄手のラグ一枚を二人並んで分け合って壁を背にして身を寄せていると、一日歩いた末の雨に足先から疲れがじんわりと広がってくるのをC.C.は感じていた。

左隣にちらりと視線を流せば、少し離れた場所に置いたランプの方を少し眠そうな目でふんわりと見ているルルーシュの横顔がそこにある。言葉は何もなく、耳に届くのは微かに漏れ聞こえる呼吸の音と、割れた窓の向こうで響く雨が草木や大地を叩く音。隣り合う腕が触れ合い、そこから互いの温もりが沁み込むように伝わる距離。

触れている部分はほんの少しなのに、どうしてこんなに暖かく感じるのだろうか。

鼻の先がツンとして、眦が熱くなる。不意に膨れ上がった衝動を抑える為にC.C.は慌てて両腕で膝をキュッと抱えて臉を伏せた。

空っぽのルルーシュを連れて旅をしていた時には、何かあればすぐに恐慌状態になるものだから宥める為に何度も抱き締めた。その時の方が身体の距離はずっと近いのに、こんなに暖かいとは感じなかった。怯えるルルーシュを抱きしめる度、自分もまた怯えていたのだとC.C.は思う。当てどのない旅の行く末に、求めるその姿があるのか。不安で怖くて、でも涙を流すことは自分に許さなかった。きつと取り戻してみせると意思を奮い立たせる為に涙はあってはならないものだった。

わがままを貫いた今、すぐ傍にある体温に簡単に涙が溢れそうになる。手にしていい幸せだと言いつけるような自信は情けないほどにない。こんなに弱い自分を知りたくなかった。

目を閉じたまま膝頭に頭を押し付け、喜びと不安とが同じ強さで湧き上がる胸の乱れを治めようとしていたC.C.は、膝を抱きかかえ右の二の腕を掴んでいた左の手の甲に柔らかく優しい体温を感じて思わず肩をびくんと跳ねさせた。

顔を上げたC.C.の方をルルーシュは見えていなかった。

右手で細く華奢な左手を包むように持ち上げ、ゆっくりと二人の間に下ろす。吸い付くように腕を触れ合わせると、長い指でC.C.の手の甲や指を丁寧に繰り返し撫でた。

「……ルルーシュ」

掠れた声に前を向いたままのルルーシュの唇が微かに笑みの形をとる。薄い大きな手の平が柔らかく小さな手の甲を壊れものを扱うかのように優しく押し、絡んだ指が甘く擦れ合う。ルルーシュの指がC.C.の指を強めに挟むような仕草をすれば、C.C.もまた絡めた指に力を籠めてそ

れに応えた。

雨音だけが聞こえる廃墟の中で、寄り添って手を繋ぐ。寂しさと静謐さと情愛が漂う世界に二つの影が一つの影となりそこに在った。

「寒くないか？」

静かな問いにC.C.は黙って首を横に振った。

「いいや、熱いくらいだよ。」

その返事は胸に秘めて、C.C.は頭をルルーシュの腕にことんと預け目を閉じた。

この温もりが長い時の流れの中で辿り着いた場所なのか、またいつか失うものなのか、今は考えないでしよう。少なくともこの夜、手を繋いでいるうちは。

「起きろ、晴れたぞ」

軽く揺すられる感覚に眠りの淵にあった意識がゆるゆると浮上し、開いた琥珀に眩しい光が満ちた。

C.C.の身体に掛かっているラグをひよいと取り上げたルルーシュは、まだぼんやりと座っているC.C.に構わず慣れた手つきで畳んで大きなリュックの上にベルトで縛って留める。

「全く、寝起きの悪い女だな」

「微睡みの心地よさを理解出来ないとは、情緒に欠ける男だ」

「減らず口は治らないと見える。朝食を作っている間に顔でも洗って来い」

「母親か、お前は」

「何か？」

知らん顔をして立ち上がり、欠伸をしながら身体を伸ばしている姿を

呆れた顔で見ていたルルーシュだったが、スッと指を上の方に向けた。

「何だ？」

「あれを見る」

指が指す方向に顔を向けたC.C.が目を見開いた。

礼拝室を出たそのすぐ上にあるバラ窓が朝日を浴びて青や赤、紫と緑、鮮やかな色を燦然と放っていた。朽ちた教会にあってなお美しい姿を留め、眩いまでの輝きを崩れた埃まみれの瓦礫の上に注ぐその様子をC.C.は言葉を失くして見上げる。

「夜には気付かなかったが、見事だな」

並んで立つルルーシュとC.C.との髪や頬にもバラ窓と通して色を灯す光が降り注ぐ。

「C.C.、お前は間違っているぞ」

出し抜けに言われてC.C.はバラ窓に向けていた陶然とした眼差しを驚きの色に変えてルルーシュに向けた。

「何？いきなり何だ」

「今は間違っているということだけ教えてやる」

「は？」

困惑が浮かんだ表情に向かってルルーシュはニヤリと満足そうな笑みを返し、ふふつと楽しげに鼻を鳴らした。

「まあおいおい俺がその間違いを正してやるよ」

「何だ、何が言いたい」

不愉快そうな声を振り払うように背を向けたルルーシュは軽く手を振ってC.C.をいなす。

「さっさと顔を洗って来い。大した材料はないがスूपくらいならすぐに作れる」

「おい、ルルーシュ！」

「グズグズするな、街に下りてギアスの欠片の在処を探すんだろ」

「……スूपよりピザが食べたい」

出たな、と溜息がルルーシュの唇から零れ、肩越しに振り返った。

「わがままな女だ」

「何だ、知らなかったのか？」

昂然と顎を上げたC.C.にルルーシュは柔らかく微笑んだ。

「知っているよ、誰よりもな」

思わぬ優しい声に面食らったように口を閉じたC.C.は、包み込むように穏やかな紫から逃げるように瓦礫の上を駆け出した。

「危ないぞ、気を付けろ」

その言葉、昨晚ここに着いた時も言ってくれたな。

背中にかける声が妙に気恥ずかしく、今度も聞こえない振りをした。

まったく、この私がまるで初心な少女のようじゃないか。

琥珀に映る世界は今まで一番眩しくて明るくて、その中に自分がいていいものなのかやはり自信がない。だからこれが幸せだと心の全部を平らにして噛み締めることはまだ難しい。

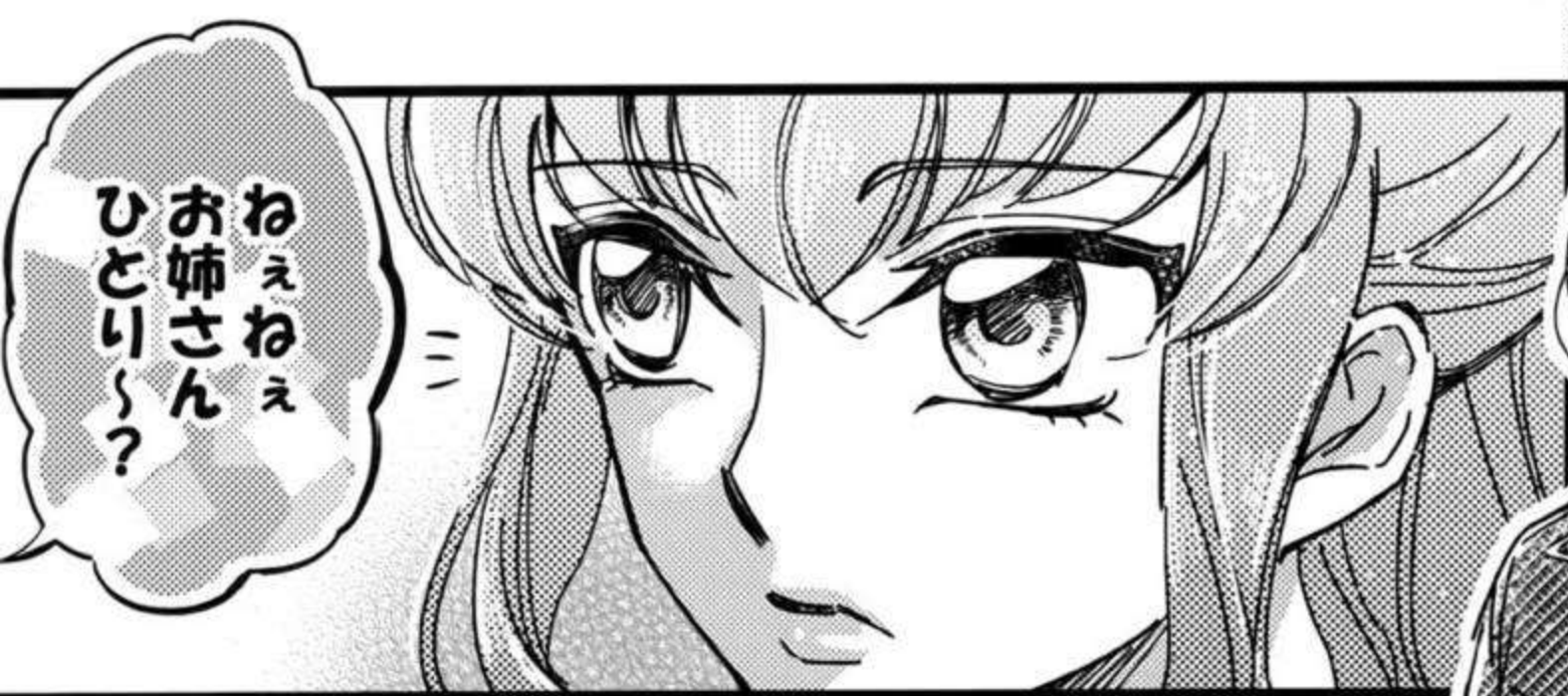
けれど。

「お前がこれから教えてくれるんだろ、ルルーシュ」

朽ちた教会の外は、昨夜の雨の雫が朝日を受け光の粒となって輝いていた。

Place of Love END





ねえねえ
お姉さん
ひとりで？



可愛いね、
どこから来たの？
待ち合わせ中？

俺らこの辺
詳しいよ

名前は？

おい



どこに
行ってたんだ
C.C.

ウ
皇

ア
ッ

君とデート
がしたい！②



お前が
勝手にいなく
なったんだらう

待っている
言っただろうが

大体お前
が……

カッ

無理……

カッ

終





急ぐ旅でもない、
休み休み行こう

お前はまだ
身体が本調子では
ないだろうしな

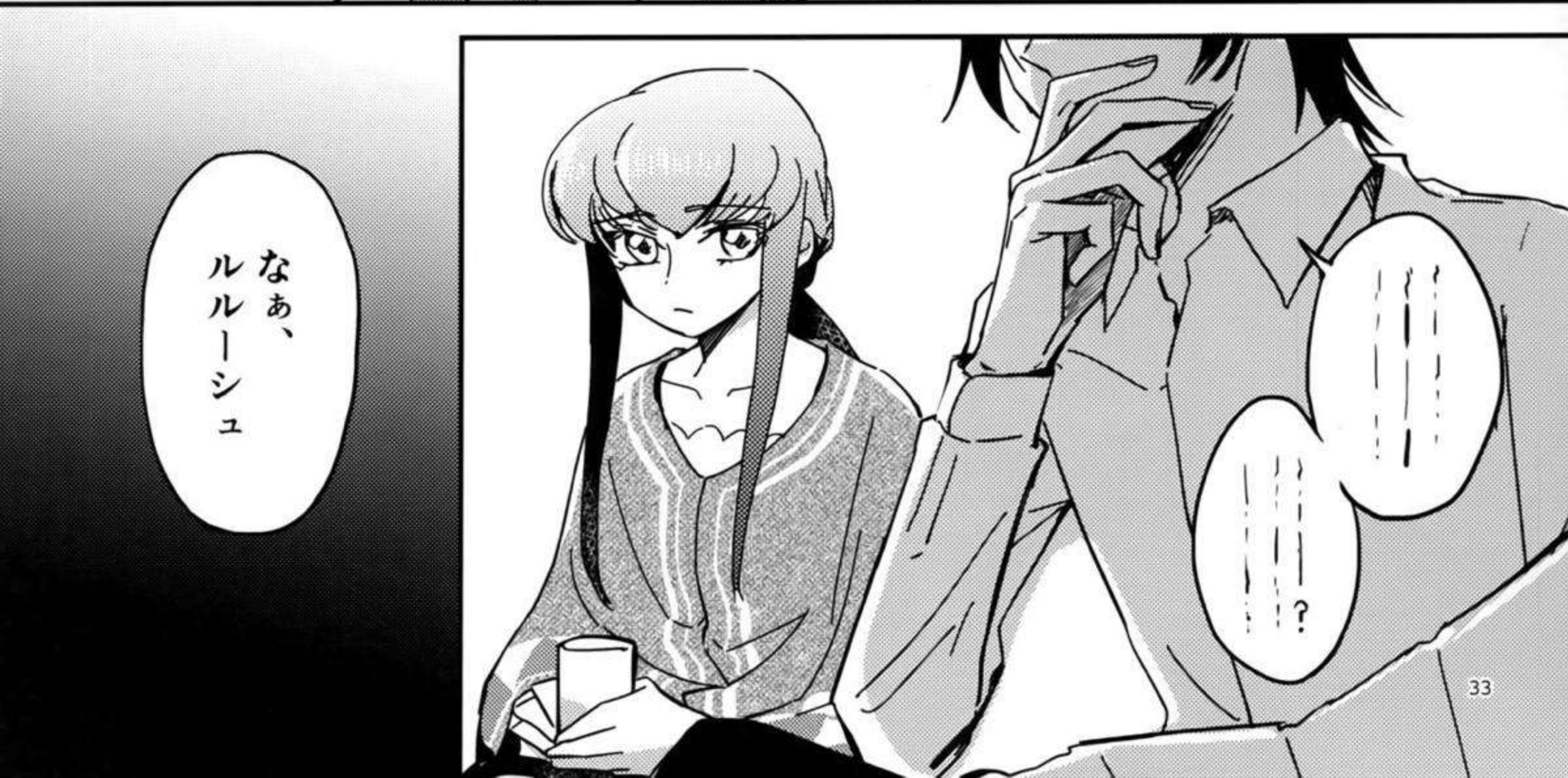
荷物は
交代で持つ

.....



いや、
俺が持つよ

荷物の重さに対し
歩行速度が合って
いないだけだ、
これからは疲労度を
と見立て速度を



なあ、
ルルーシユ



私に
ついてきた事を

後悔して
いないか



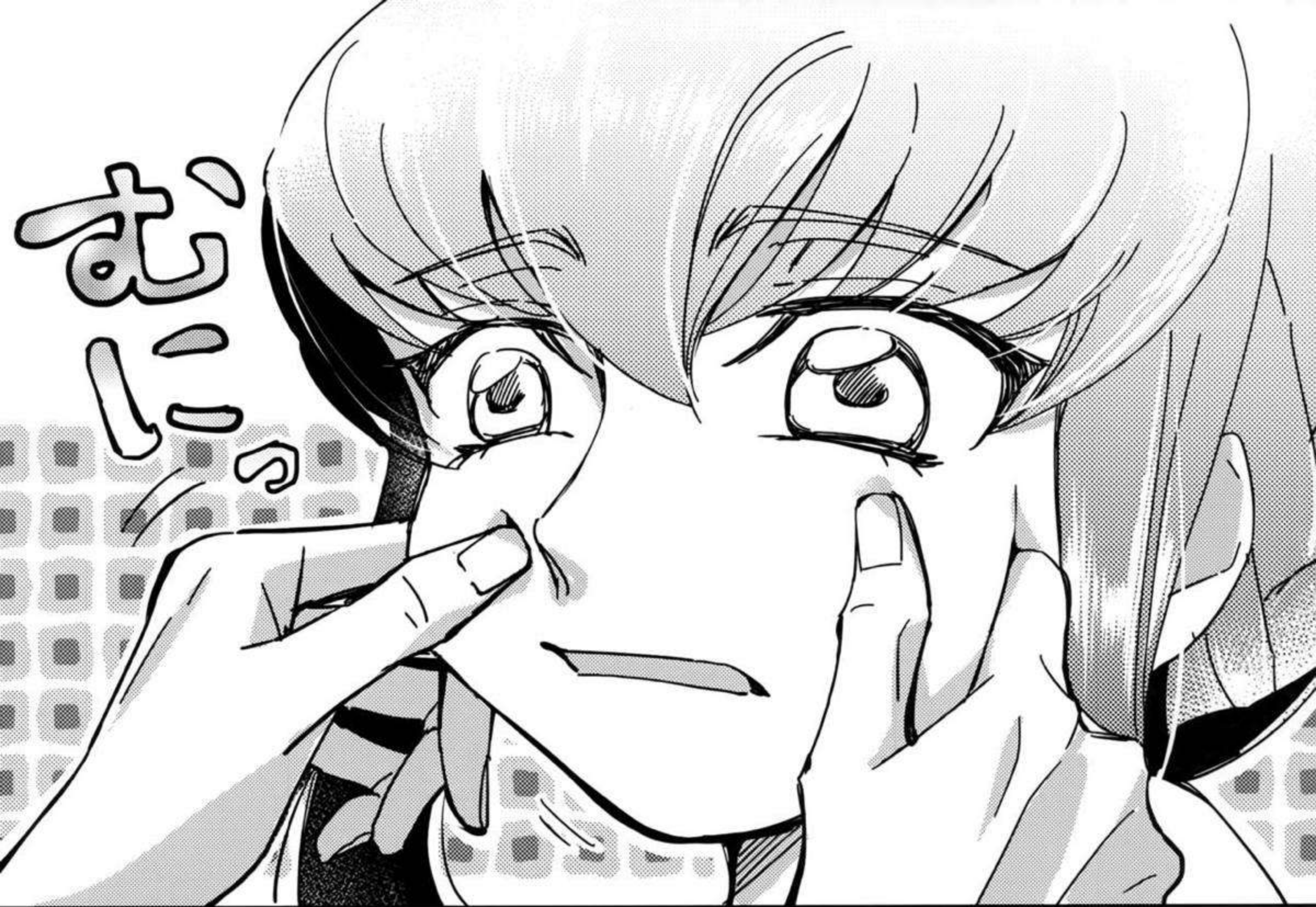
私に義理を感じて
いるだけなら、
まだ引き返す道が



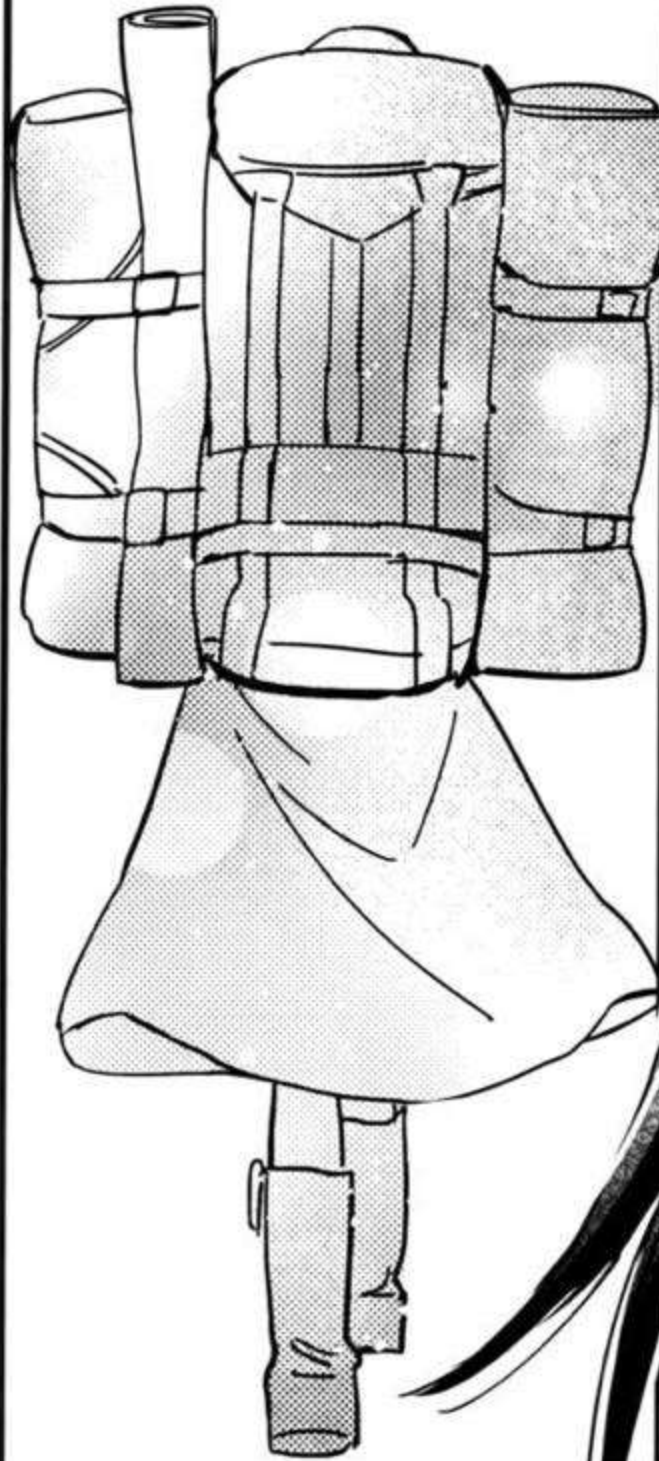
あのままスザクに
ゼロを託して

あんなに大事だった
ナナリーを残して

あそこには
お前を必要と
してくれる人が
たくさんいたんだぞ



あの時お前を
追いかけたのは
俺の意思だ



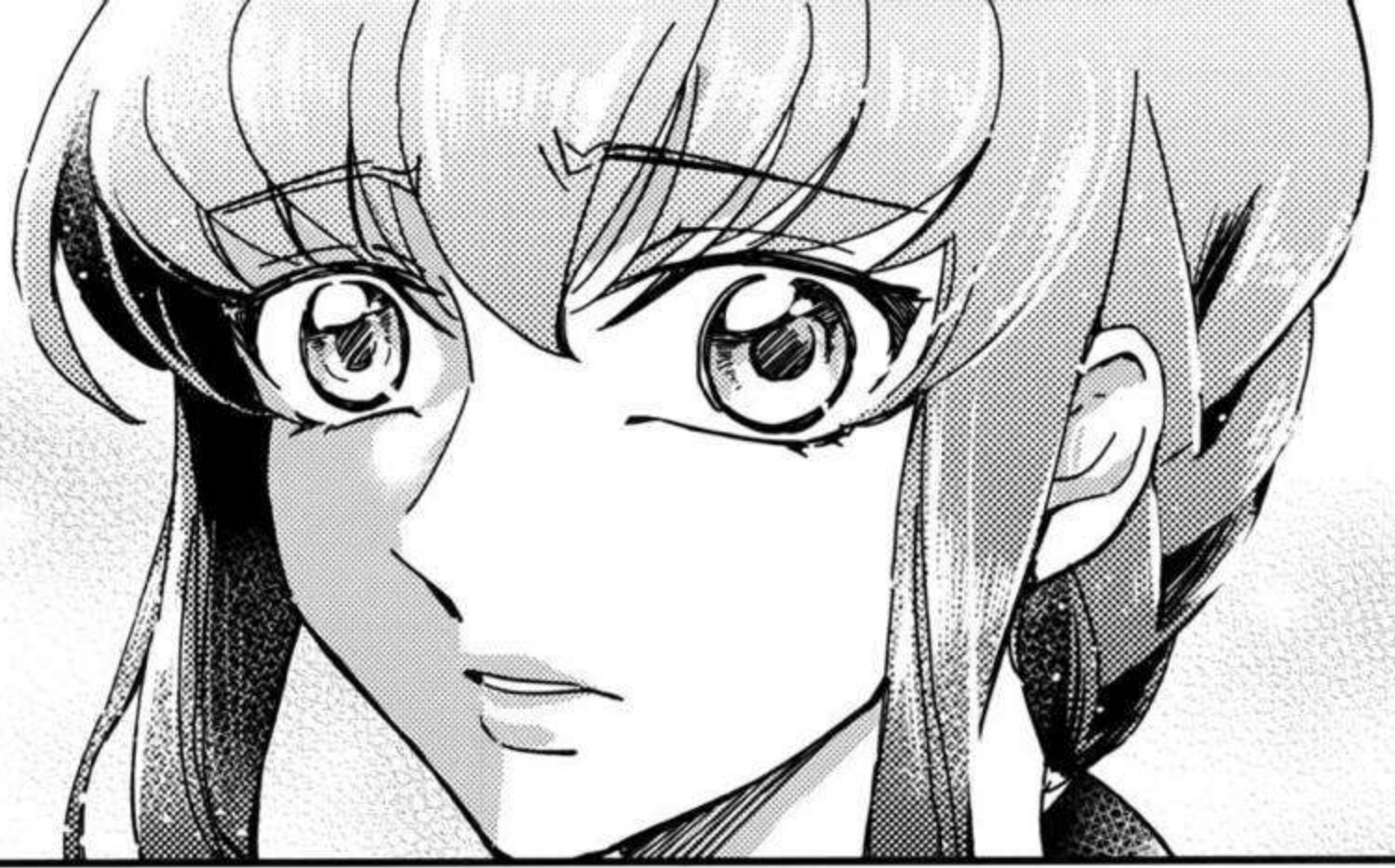
俺がそうした
かったから

ここに居る事は
誰かに強要された
わけじゃない

今までも、
そしてこれからも
俺はやりたいように
する



それだけの事だ



ルル

そろそろ
休憩は終わりだ!

さあ行くぞ、
お前はそ
ぬいぐるみを持て



それで、俺は

やりたい事しか
やらないから



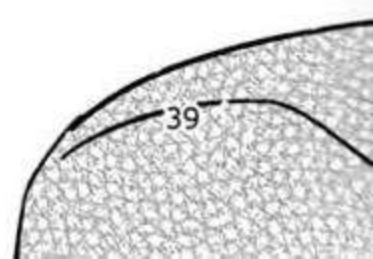
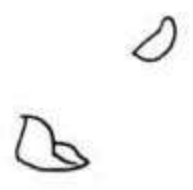
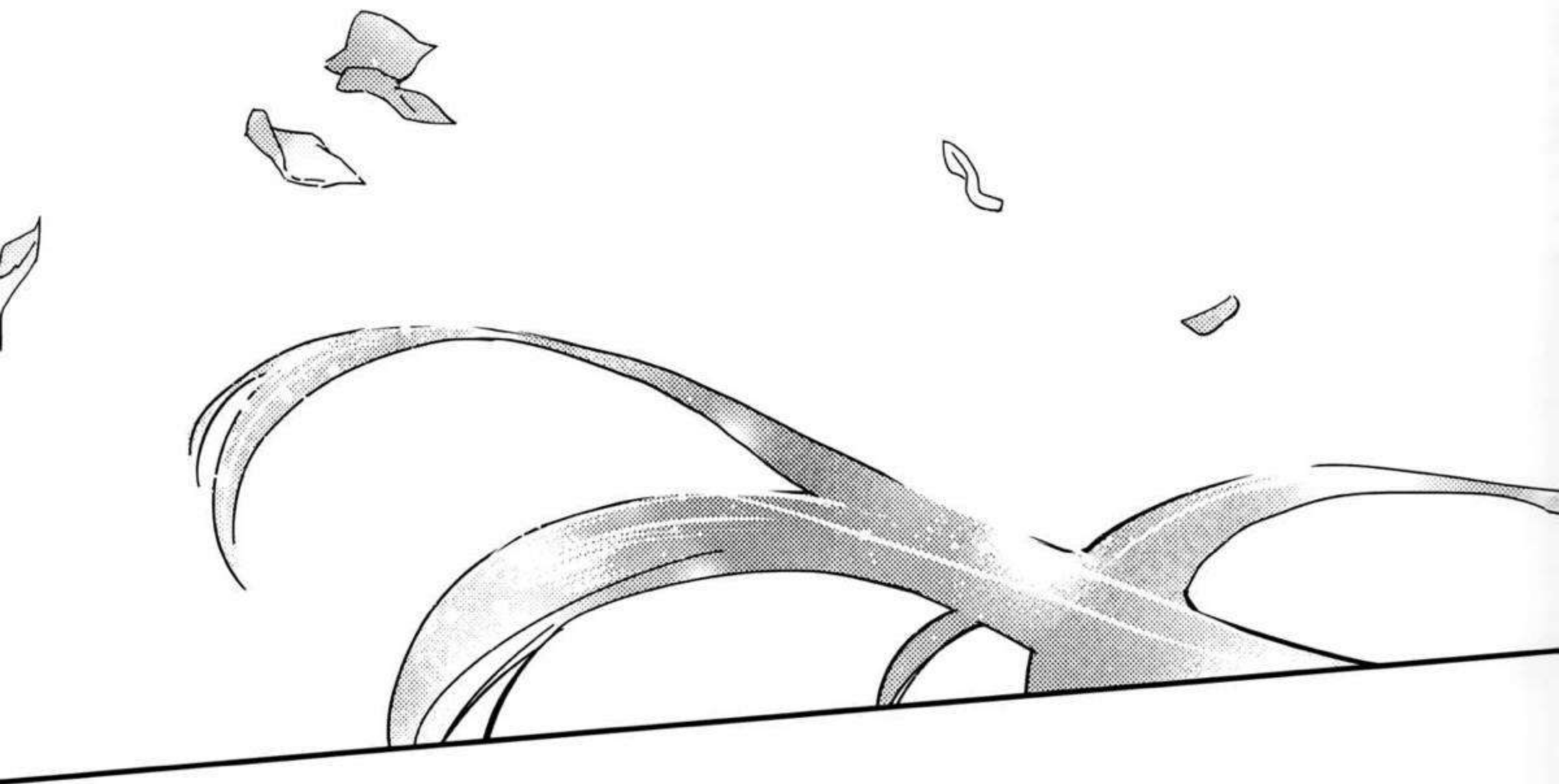
その、
なんだ

手を出せ
C.C.



そういうのは
黙ってするんだよ





あとがき



初めまして、ピロ子です。

ギアスではもうかれこれ10冊以上本を作ってきましたが、ハマりたてのような新鮮でワクワクした気持ちで描けたのがこのルルC本「Place of Love」でした。新しい可能性と展開を見せてくれた復活映画、不安もありましたが観る事ができて本当によかったです。イベントでスペースを取って本を出してしまうくらいにはルルCが大好きになりました…。笑 合同誌だから私ばかり描くのもどうよ…と最初は控えていたものの、ぐりきちさんの「遠慮すんな！」の一言で結果3本も漫画を描いてしまいました。張り切りすぎやろ。

読み返すとどれも取るに足らない内容ばかりですが、描いている本人は無茶苦茶楽しかったです。読んで頂いた方にも、ちょっとでもその楽しさが伝わっていたら幸いです。

ピロ子

手を繋ぐ二人の後ろ姿があまりにも愛しくて、本編治いなど書いたこともなかったのに初めて書いちゃったよ、しかも復活治いルルC！

初めましてこんにちは、ぐりきちです。
いつもはルル受のひとなのですが、本を出しちゃうくらいにはルルC大好きです。
ハッピーで可愛いルルCはピロ子さんが萌を叩き込んで描いてくれると分かっていたので、私は人の理を外れて生きる辛さと苦しさをベースに抱え、でも二人で並んで生きていくなら不幸ではないと信じられるルルCを書こうと思いました。
ルルーシュに愛されていると心底信じられるようになった時、C.C.からもルルーシュに愛を伝えられるようになるんだろうなと思っています。

この世で一番「Lemon」が似合わなくなった二人に心から乾杯！

ぐりきち

漫画

ピロ小屋 / ピロ子
pixiv id=1563952
twitter @piloco_cg
umechiro@hotmail.com

小説

Double I / ぐりきち
pixiv id=13273298
twitter @gridgrid3
doublebleii@gmail.com

2019/4/28 発行

印刷 BRO'S

Place of Love

